

普及情報

揖保川緑のゼロエミッションの取組

はじめに

ゼロエミッションとは、産業間の連携などにより廃棄物を資源として再利用し、廃棄物のない循環型社会をめざす取組である。ここでは、河川敷雑草を畜産農家で堆肥づくりに利用し、地域の土づくりに取り組んだ事例を報告する。

河川敷雑草の有効利用

多くの畜産農家は、家畜ふん尿の堆肥化に取り組んでいるが、おがくず等の水分調整材の確保やその経費、堆肥の利用促進が課題である。普及センターでは、国土交通省が、揖保川の保全管理のために刈り取った堤防の雑草を、野焼きへの苦情や経費節減のため、焼却処分しにくくなっていると聞き、水分調整材に使えないかと考えた。

そこで「揖保川緑のゼロエミッション実証調査事業」を立案し、畜産農家や国土交通省、耕種農家、行政・団体で構成する検討会を設けて、2005年度から堆肥化及び施用試験に取り組んだ。国土交通省から河川敷雑草の提供を受け、酪農家の堆肥施設で乳牛ふんと混合し堆積した。できあがった堆肥は、おがくずを混合した堆肥と遜色ないものであった。

この堆肥を耕種農家で、水稻、小麦、黒大豆、軟弱野菜、イチジク等に施用した。作物の生育は良好で、土壤中の腐植含量も増加し、従来の堆肥同様の効果が確認できた。また気になる雑草の発生は、水稻では無かったが、畑作では多少みられた。

ゼロエミッションの輪づくり

これまで当管内の畜産農家は、個々に堆肥利用者を探して供給しており、堆肥は一部の農家に利用されているにすぎない。そこで今年度、集落営農組合と畜産農家の連携をすすめ、5営農組合で30haを超える堆肥散布ができた。

ゼロエミッションの定着に向けて

この取組を契機に、地場産業の醤油組合と地元農家が連携し、醤油粕も堆肥にして醤油原料の高タンパク小麦栽培に施用する取組が始まった。

ゼロエミッションは、関係者の理解と協力がなければ実現できない。今後も関係者の連携を強固にし、堆肥流通体制の整備などをすすめていきたい。

佐藤 吉昭（龍野農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：0791-63-3711代）



図1 河川敷雑草



図2 堆肥づくり

ひょうごの農林水産技術 No.156

平成20年3月1日（隔月刊）

兵庫県立農林水産技術総合センター（0790）47-2400